

ユネスコエコパークを活用した教員向け研修の実施と考察

—大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパークの理念と ESD との関連性を踏まえて—

東晃太郎

(奈良教育大学 社会科教育専修)

木村直希

(奈良教育大学 心理学専修)

藤本尋巳

(奈良教育大学 音楽教育専修)

田中愛花

(奈良教育大学 国語教育専修)

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座(地理学))

Implementation and discussion of training for teachers using Biosphere Reserves:

Based on the Concepts of the Odaigahara-Omine-Osugidani Biosphere Reserves and its Relevance to ESD

Kotaro AZUMA

(Social Studies Education Specialization, Nara University of Education)

Naoki KIMURA

(Psychology Specialization, Nara University of Education)

Hiromi FUJIMOTO

(Music Education Specialization, Nara University of Education)

Aika TANAKA

(Japanese Education Specialization, Nara University of Education)

Daichi KOHMOTO

(Department of Social Studies Education(Geography), Nara University of Education)

要旨：本稿は、2023年8月21日に奈良県吉野郡下北山村で行われた「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパークにおける教員向け現地エクスカージョン」の企画・実施報告である。奈良県と三重県にまたがる本ユネスコエコパークを活用した学校教育を推進し、教員同士の交流により地域間の交流・連携を生み出すことを目的としている。本年度の舞台となった奈良県吉野郡下北山村前鬼は約1300年前、前鬼と後鬼という鬼の夫妻が住み着いた地で、この鬼の子孫が今でも前鬼の地を守っている。そのような前鬼の自然と人間の調和を図る取り組みやその方法を、教育を通じてどのように活用できるかについて、約半年をかけて学生自らが学習し、研修当日にはそれまでの学びも踏まえて、教職員や行政の方々と共にそれぞれの経験と知識を生かして交流し合った。また、ESDとの親和性も高く、本実践でも特に「前鬼×SDGsからはじめる」ワークショップにおいてその関連性を探ることができた。

キーワード：ユネスコエコパーク Biosphere Reserves

自然と人間の調和 harmony between nature and humans

下北山村前鬼 Zenki, Shimokitayama Village

持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development

1. はじめに

奈良県と三重県にまたがる「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」は、自然環境の利用と保全の調和を目指した持続可能な開発のモデル地域として日本ユネスコ国内委員会に認定されている。ユネスコエコパーク

(正式名称：生物圏保存地域)は、合理的かつ持続可能に自然を利用し保全していくユネスコ MAB (Man and the Biosphere) 計画の主要活動のひとつであり、豊かな生態系を有し、地域の自然資源を活用した持続可能な経済活動を進めるモデル地域である。世界自然遺産が、顕著な普遍的価値を有する自然を厳格に保護することを主目的とするのに対して、ユネスコエコパークは、自然の保護と

地域の人々の生活（人間の干渉を含む生態系の保全と経済社会活動）とが両立した持続的な発展を目指すことが理念として挙げられる。現在 10 ヶ所の地域が日本ユネスコエコパークに登録されている。日本で初めて 1980 年に「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」は登録された。上記の理念を推進するために、様々な取り組みがされている。本実践もその取り組みのひとつであると考えられる。小川ら（2022）は「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」と同様に日本ユネスコエコパークに登録されている「屋久島・口永良部島ユネスコエコパーク」や「只見ユネスコエコパーク」はユネスコエコパークの理念が地域のまちづくりに比較的強く反映されているのに対して、「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」は強く反映されていないという考えを示しており、理由として前者が単独自治体型であるのに対して、後者は複数自治体型であるため、地域間での温度差があって理念が地域のまちづくりに強く反映されないのではないかと述べている。

本実践ではこのようなユネスコエコパークを活用した特色ある学校教育を推進するとともに、教員同士の交流、地域間の交流により当該エリアの教育等を通じた連携を生み出すことを目的としている。そのもとで「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパークにおける教員向け現地エクスカージョン」が 2022 年度から実施されており、今年度が二度目の実施となる。2022 年度は三重県の大台ヶ原（東大台）で実施され、本年度は奈良県吉野郡下北山村で実施することとなった。本実践は 2022 年度に開設された奈良教育大学の「へき地教育・地域創生プログラム」における「へき地・小規模校教育実践への参画」のひとつとして位置づけられ、奈良教育大学からは社会科教育講座の河本と本稿執筆の学生 4 名が参加することとなった。本稿では、教員向け現地エクスカージョンまでの取り組みや本実践での学び、ESD との関連性などについて探っていく。

本稿の執筆は、「1. はじめに」及び「5. おわりに」を田中が、「2. 教員向け現地エクスカージョンに向けての活動」を木村が、「3. 教員向け現地エクスカージョン当日」を藤本が、「4. 参加者アンケートの分析、ESD・SDGs との関連性」及び全体構成・編集を東がそれぞれ担当し、河本が全体の取りまとめをおこなった。

2. 教員向け現地エクスカージョンに向けての活動

本実践は昨年度の 1 月 19 日の「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク協議会担当者会議」から始まった。エクスカージョン当日の 8 月 21 日までの半年以上の間、学生間でオンライン会議を重ねて内容を練り、担当者会議では、各地域の行政職員や環境省の職員と議論を重ね、様々な人から意見をいただきながら二度の現地視察を行った。この会議では、開催時期、対象、地域と場

所を大方決定した。開催時期は夏休み、対象は現職教員、地域は下北山村または天川村となっていた。どちらにするか会議を重ねた上で、本年度は下北山村に決定した。

一度目の現地視察では、まず村内にどのような場所があるのかを知ることから始まった。この時点で筆者ら（学生）はほとんど何も知らないままであったため、現地を訪れて様々な場所を見ることから始めた。この視察では村内全体を回り、どのような場所でどのような研修を行うことができるのか、ESD や SDGs との関連性についても考えた。

学生間の会議では、現地視察で確認した場所を踏まえて村内のどこを回り、何を学ぶことができるのか、ユネスコエコパークを活用した現職教員向けエクスカージョンであるため、ユネスコエコパークの理念に加えて教育との結びつきを意識して仮のコースを設定した。仮のコースでは自然と人の暮らしの共存を学ぶことができる池原ダム、村内の歴史を学ぶことができる下北山村歴史民俗資料館、池が神体である池神社、修験の里として深い歴史を持つ前鬼地区などが候補に挙がり、それぞれの場所でどのような学びを得ることができるのかを考えた。また実際に現地を訪れて体験・学習した後にワークショップの場を設ける計画を立てた。コースを考える際は、地理的な要因から移動に時間がかかり、回ることでできる場所が限られていたため、大きな駐車場がある下北山村スポーツ公園きなりの郷を集合場所として考えた。また、前鬼地区は移動に時間がかかるため前鬼地区を含むコースと含まないコースの 2 種類のコースを設定し、仮の計画書を作成した。

担当者会議では、仮計画書を共有し、それに対して多くのアドバイスをいただいた。アドバイスをもとに、以下の点に修正を加えた。本実践のねらいであるユネスコエコパークの理念についてどのように学びを深めるのかについて回るスポットを踏まえて再度考え直すこと、実際に下北山村内では自然と社会がどのように共存・活用されているのかについて整理すること、回る場所を一ヶ所に絞る多くの時間を使って学びを深めることにした。そして、この担当者会議で前鬼地区を取り上げ、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる大峯奥駈道に登る修験者たちを約 1300 年前から代々支えてきた宿坊「小仲坊」



図 1. トチノキ巨樹群（東撮影）

の61代目当主である五鬼助義之氏にお話を伺い、奈良県指定天然記念物であるトチノキ巨樹群(図1)で散策を行った後に下北山村立下北山小中学校でワークショップを行うことを決めた。

二度目の現地視察では、あらかじめ五鬼助氏に学生がインタビューを行い、前鬼の歴史や鬼の伝説、里の様子や普段の暮らしなど様々な話を伺った。教員向け現地エクスカーション当日には視察の際に聞かせていただいた話の内容をもとに筆者らのうち大学生が五鬼助氏へ質問をして答えていただく形式で進めることにした。また、その他に移動する時はどれぐらいの時間がかかるのか大まかな時間を計った。

このように、当日までの流れとして、はじめはダムや資料館など訪れる場所として様々な候補を挙げていたが、会議や二度の現地視察を経て、ユネスコエコパークの理念に沿って学ぶことのできる場所として前鬼地区を選択し、五鬼助氏へインタビューを行うことになった。

3. 教員向け現地エクスカーション当日

このような活動を経て、「令和5年度大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパークを活かした地域教育を考えるエクスカーション」は、2023年8月21日に表1の行程で行われた。参加者は、「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」内の自治体に所属する公立学校教員5名、役場職員14名、環境省職員2名、加えて奈良教育大学教員の河本と学生4名の計26名であった。

表1. エクスカーション当日の行程(藤本作成)

時間	場所	内容
10:30~10:40	きなりの郷	開始式(行程と企画の説明)
10:40~11:30	きなりの郷から前鬼集落へ移動	
11:30~12:30	前鬼集落宿坊跡・トチノキ巨樹群	前鬼集落宿坊跡・トチノキ巨樹群の見学
12:30~13:00	小仲坊	昼食
13:00~13:40	小仲坊	宿坊住職・五鬼助義之さん・妻美津子さんへのインタビュー
13:40~14:50	前鬼集落から下北山村立下北山小中学校まで移動	
15:00~15:30	下北山村立下北山小中学校	今日の学びを踏まえたワークショップ
15:30	下北山村立下北山小中学校	終了式

まず、前鬼入口から前鬼集落までの道のりで、「前鬼山・不動七重の滝」(図2)を見学した。次に、宿坊跡・トチノキ巨樹群を、下北山村役場地域振興課職員のガイドのもと見学した。かつて存在した前鬼と後鬼の夫妻の子ども五鬼(五鬼熊・五鬼童・五鬼上・五鬼継・五鬼助)が、それぞれ行者坊・不動坊・中ノ坊・森本坊・小仲坊を営んでいたと伝えられており、その中で現在もなお残っている小仲坊(図3)を出発し、他の宿坊が立てられていた場所を順に巡った。そして、宿坊跡群からさらに20分程その先を進み、奈良県の天然記念物にも指定されているトチノキ巨樹群を見学し、トチの実が古くからこの地で保存食として活用されていたという歴史を確認した。巨



図2. 前鬼山・不動七重の滝(東撮影)



図3. 宿坊「小仲坊」(東撮影)

樹群の中心にある樹齢約200年とも言われている大木を目の前にすると、自然の偉大さを感じる荘厳な雰囲気があり、参加者全員でその洗練された空気を味わった。

下山して昼食をとった後、五鬼助義之氏と妻の美津子氏に話を伺った。学生が進行を務め、義之氏には、義之氏の幼少期からの下北山村での暮らし、前鬼や宿坊の歴史、修験道としての前鬼や宿坊の役割、トチの実の活用について等についての話を、美津子氏には、前鬼での暮らしと普段の大阪での暮らしとの違いと共通する部分についての話を伺った。お二人の話から自然と共に生活することの喜びと持続可能性、これまでの歴史を守り受け継ぐことの責任と重要性を学んだ。

最後に、下北山村立下北山小中学校にて、エクスカーションを通しての学びを踏まえたワークショップを学生の進行のもと実施した。「前鬼×SDGsからはじめる」をテーマに設定し、当日の気づきや学びをESD・SDGsと結び付けながらグループに分かれて振り返り、今後の活用の可能性について話し合った。話し合いの中で、豊かな自然が残されていること、代々宿坊を守ってきた方たちの偉大さ、きれいな水やトイレが整備されていることなどが前鬼の良さ・魅力として挙げられた。一方で、前鬼の持続可能性を考えると、シカをはじめとする野生動物とトチの実やその周りの自然との共生についての不安、前鬼集落までのアクセスの不便さを考えると興味のある人しか訪れないのではないかと懸念、定期的な道の整備の必要性などが課題点として挙げられた。そして、まとめとして、今回の学びを通し、行政職員間でも一人ひ

とりの負担を減らしながらみんなで協力して守っていくこと、前鬼の良さや魅力を理解し、案内したり他者に発信したりすることができる人材の育成等が必要なのではないかという意見が挙げられた。

本実践を通して、教育関係者や行政職員の視点からも話を伺うことができたことにより、これまで筆者らが事前に学んできた前鬼について、改めて多角的に捉えることができた。ただ行政と協力してこのユネスコエコパークを守るのではなく、行政職員の中でも、実際に現地へ赴き不備がないか観察する、補正・整備の作業をする、金銭管理をするなどの様々な役割があり、関係する一人ひとりがその守るべきものの良さや魅力をきちんと知らなければいけないのだろうと考えた。そのためには、行政からの発信だけでなく、学校教育においても、子どもたちがその良さや魅力・課題について深く理解できるようカリキュラムマネジメントを行い、発信できる人材を育てる役割があるのだということ、そして、行政と学校・教育が相互に繋がって、相乗効果を生み出すのではないかと気づかされた。教育関係者や行政職員だけに限らず、参加した学生4名にとっても、有意義な研修となった。

4. 参加者アンケートの分析、ESD・SDGs との関連性

本実践終了後、参加者に対して実施したアンケートの結果を、主催者である三重県多気郡大台町役場企画課の担当者に共有してもらった。参加者のうち13名から回答を得ることができた。本章では、そのアンケート結果を独自に分析し、そこから分かることや改善点、さらに、ユネスコエコパークの利活用とESD・SDGsの関連性について本実践から見てきたことについて述べる。

4.1. 教員向けエクスカージョンの満足度

満足度は、「とてもよかった」が31%、「よかった」が61%、「どちらともいえない」が8%であり、比較的高い。教育関係者は「とてもよかった」との答えが多数であり、行政職員は「よかった」との答えが多かった。本実践のよかった点として、地域の自然や歴史・文化等学術的内容の解説を聞いたことや参加者が対話を重ねて話し合うことで様々な意見を聞いたこと、普段は立ち入らない前鬼の地で理解を深められたことなどが挙げられた。奈良教育大学の学生が前鬼の地を訪れ学んでもらえたことがよかったとの回答もあった。

「とてもよかった」と「よかった」との回答の違いには、これまで前鬼の地を訪れたことがあるかどうかが大きく影響していた。大多数の教育関係者が、「今回初めて訪れた」と述べている。初めて訪れた人々にとっては、新たな充実した学びを提供することができたのではないだろうか。一方で、半数近くの行政職員は「複数回訪れたことがある」と述べている。中には20回ほど訪れたことがある方の参加もあった。複数回訪れたことがある人々に

としては、少し物足りなさを感じたのかもしれないと考えた。よりユネスコエコパークの理念と前鬼の地を融合させた独創的な研修を提案できればよかったという反省点もある。

しかし、多くの方が満足されており、企画自体は有意義なものであると感じた。よかった点はさらに伸ばし、反省点は改善して次回以降の教員向け現地エクスカージョンに活かしたい。

4.2. ユネスコエコパークの教育的活用

教育関係者、行政職員へのアンケートについて、エクスカージョン自体の満足度はかなり高いことが前節で分かった。ユネスコエコパークの教育的活用について、次の2つの質問を行った。「今後、学校の授業や行事等で取り入れる可能性はありますか?」という質問に対して、5名の教育関係者の内、2名が「ある」、3名が「ない」と回答した。また、「ユネスコエコパーク協議会内の学校間交流に関心はありますか?」という質問に対して、1名が「ある」、4名が「ない」と回答した。これらの回答結果から、学校の授業や行事、学校間交流などでユネスコエコパークを教育に取り入れていくことができるかについては少し難しいという意見が多かったことが分かる。難しい理由として、やはり学校のカリキュラムにおける問題や距離、受入可能者数などの問題を危惧している参加者が多かった。前鬼の地は普段訪れることが厳しい人里離れた場所であり、学校教育で活用することは大変な側面があるように思われた。また、教職員や教育委員会関係者の参加者数が少なかったという課題点もある。「教員向け現地エクスカージョン」であるにも関わらず、教職員や教育委員会など、教育関係者の参加者数が少ないというのは趣旨が異なってくるのではないだろうか。今後、さらに積極的に教職員等に呼びかけるなどの改善を行っていく必要があるだろう。より多くの教育関係者が参加して意見を出し合うことで、ユネスコエコパークの教育的活用の意義がさらに深まると考える。

4.3. ESD・SDGs との関連性

ユネスコエコパークの目的は生態系の保全と持続可能な利活用の調和（自然と人間社会の共生）であり、ESD（持続可能な開発のための教育）とも深く関連する。今回の教員向け現地エクスカージョンは、主に自然と暮らしに着目した内容であった。自然と人間の関わりを理解し、自然の保全・再生を目指すことが重要であると考え。自然を守らなければ、持続可能な暮らしはできない。豊かな自然を理解し、守る態度を養うために、本実践のような研修や学校教育が行われているのである。松井（2021）は、ESDあるいは環境教育はユネスコエコパークの機能のひとつとして組み込まれているためESDとは親和性が高く、理念に沿った活動をすれば、持続可能な地域へと近づける助けになるし、試行錯誤する過程はESDとなる

と述べている。ユネスコエコパークはESDの目標を達成するために利用されているだけではなく、取り組みの過程自体がESDとなっているのである。試行錯誤して準備してきた本実践自体もESDの活動と言えるだろう。

本実践において、前鬼の地を訪れ、自然に触れたり五鬼助氏の話の聞いたりした後、まとめとして行った「前鬼×SDGsからはじめる」ワークショップでは、自分の気づき、今後に生かせること、課題点の3観点に分けてSDGsの目標との関連性を探った(図4)。教育関係者、行政職員それぞれの視点から課題と関連性をまとめ、最後にポスターセッションを行った。教育を通じてSDGsの目標達成とユネスコエコパークの利活用を考えていくことが重要となるだろう。

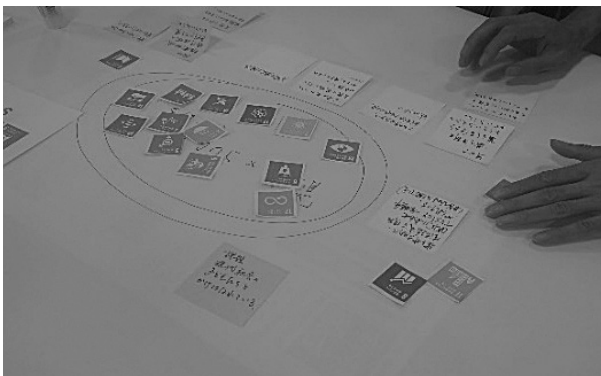


図4.「前鬼×SDGsからはじめる」ワークショップにおける討議の様子(東撮影)

5. おわりに

奈良県でESDを推進していくためには、ESDの理念と関連性の深い「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」の利活用も候補のひとつとなるだろう。自然環境の保全や利用を考える活動は、ESDの推進やその理念を取り入れた学習指導要領の趣旨を実現することにも寄与する。本実践での提案が大台ヶ原・大峯山・大杉谷の環境教育プログラムとなり、教育現場において実践されることで、自然環境の保全と活用に関心を持つ児童生徒が増え、自然環境の保全にもつながるのではないだろうか。本実践でも「前鬼×SDGsからはじめる」ワークショップを行い、学校教育の視点のみならず、行政の視点からも「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」の利活用を提案したことが、ユネスコエコパークの保全と活用を考えるきっかけとなった。このような機会を通し

て、一人ひとりが「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」の保全と活用を考え、行動していくことが大切ではないだろうか。

謝辞

本実践にあたり、教員向け現地エクスカージョンを企画・案内していただいた三重県多気郡大台町役場企画課の宮本誉様をはじめとする皆様、奈良県吉野郡下北山村役場地域振興課の栗山有佳様・堀内亮介様、環境省近畿地方環境事務所吉野管理官事務所の鶴飼匠太様、インタビューにご協力いただいた五鬼助義之様・三津子様、当日参加していただいた行政職員並びに学校教職員等の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 日本ユネスコ国内委員会(2020),「ユネスコエコパーク―自然と人の調和と共生―」。
- 小川怜・十代田朗・津々見崇(2022),「ユネスコエコパークを通してみた持続可能な地域振興の可能性」, 観光研究 34 (3), pp. 89-98.
- 山本浩大・松井淳・中澤静男・中村基一・若森達也・佐竹靖(2023),「ユネスコエコパーク大台ヶ原を利用した中学生向け森林生態系ESDワークショップとその効果」, ESD・SDGsセンター研究紀要, 第1号, pp.11-17.
- 松井淳(2021),「ユネスコエコパークのESD教材開発」, 奈良教育大学ESD書籍編集委員会編著,『学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践』, 協同出版, pp.169-172.
- 日本ユネスコエコパークネットワーク(2021),「ユネスコエコパーク」(2023年11月23日最終閲覧), <https://main-jbrn.ssl-lolipop.jp/wp-content/uploads/2023/07/59c53c30d05243d49043710ad130ae4a.pdf>
- 文化庁吉野地域日本遺産活性化協議会, 日本遺産吉野, HOME≫構成文化財/スポット≫前鬼のトキノキ巨樹群(2023年11月23日最終閲覧), <http://japan-heritage-yoshino.jp/tradition/%e5%89%8d%e9%ac%bc%e3%81%ae%e3%83%88%e3%83%81%e3%83%8e%e3%82%ad%e5%b7%a8%e6%a8%b9%e7%be%a4/>

